

図書館の裏側

ー図書館学生スタッフとしての新たな発見ー

小川 匠

現在、私は立命館アジア太平洋大学の図書館で学生スタッフとして図書館に関わっています。LA (Library Assistant) という名で活動する学生スタッフには、主に2つの仕事があります。ひとつは、図書館では基本的な貸出返却作業や排架作業です。そして、学生の立場から図書館の向上に取り組むチームの仕事があります。私は、LAとして働くことで、図書館を知る機会ができ、図書館に興味を持つようになりました。それゆえに、今年の夏に司書講習に通うことを決意し、図書館や司書の役割などについて勉強しました。

ここでは、LAとして眺めていた時の図書館と、講習後に改めて感じた図書館の役割や課題・解決策について述べていきたいと思います。

2か月間の講習では様々な科目を履修しました。その中でも特に図書館と司書の重要性を感じたのは、レファレンスサービスについてでした。講習以前から、図書館に魅力を感じていましたが、その理由は司書のレファレンス能力の高さに興味がありましたし、私の大学にもレファレンスコーナーがありますが、実際に使った経験はなく近くて遠い存在だったからです。また、レファレンスサービスは図書館の仕事の中でも専門性が高いこともあり、LAの仕事にはなりません。

講習中にレファレンスサービスの演習がありましたが、想像以上の難しさに驚き覚えました。なぜなら、正確に質問の内容理解なしでは、答えを探し出せないからです。そのために、レファレンスツールは大切な道具となります。事典（ことてん）や辞典（ことばてん）などの二次資料は、要求された情報の概要を捉えるのに大いに役立ちます。したがって、二次資料の所蔵量が問題解決の可能性を高めることにもつながります。

この点に気づいた時、私はあることにも気づきました。大学のレファレンスコーナーを見渡した時、今までは重要には見えなかったファレンスコーナーが、急にレファレンスサービスを行うための大事な道具に見えてきたのです。それ以来、レファレンスコーナーに愛着と信頼感が湧き、図書館の中で一番大切なところだと感じるようになりました。

しかし、問題はレファレンスサービスやコーナーを使う利用者が少ないことです。せっかく、有能な司書と多くのレファレンスツールが揃っていても、利用者が少なくでは宝の持ち腐れになってしまいます。この問題の原因は、学生が図書館は本を借りるところとしてしか認識していないことや、レファレンスサービスのこと自体を知らない可能性があります。

そのような中で、利用頻度を高めるために何ができるのでしょうか。その答えは、学生の立場から図書館に企画を提案することができるLAだと思います。そして、ひとつの解決策はレファレンスサービスを認識してもらうために利用者に呼びかけをすることだと考えます。図書館内の掲示板を使って利用者に利用を呼び掛けることができますし、また、小冊子を通じ学生に配布することもできると思います。まずは、レファレンスを知ってもらうことから始まり、最終的に利用頻度を高める

ことができると思います。

学生は図書館で本を借りて勉強するもので、図書館とは切っても切れない関係にあります。図書館が本を借りるためだけの場所で終わらないためにも、レファレンスの重要性と有益性を知ってもらい活用してもらえよう、これからLAとして頑張っていきたいです。

2010年の夏休み2ヶ月間は、司書講習に参加することで刺激的でした。LAとして働いていた時には、見えなかった図書館の一面に気付くことのできた意義深いものでした。講習を通じ、図書館の使命や機能を再認識し、また、司書の役割が非常に重要だということを知り嬉しく思います。



司書講習受講中（2010年）別府大学